

万葉集卷十五の「海辺望月作歌九首」

森 本 直 子

—

万葉集卷十五の前半部には、二十六の小歌群から成る四五首の歌群が収められている。天平八（七三六）年の六月に新羅に遣わされ、翌年の一月に帰京した使人たちの歌と目録に記されている、いわゆる遣新羅使人歌群である。

この歌群は、現在でも未だ解決し得ない多くの問題を抱えている。たとえば、歌群の約四分の三を占める無記名歌の作者は誰か、その筆録者は誰か、編集者（再構成者）は誰か、また、これらの歌群は虚構なのか実録なのかなどの問題である。

この歌群の中に、「海辺に月を望みて作る歌九首」という題詞をもつ小歌群がある。これは、題詞に「月を望みて作る」とありながら月そのものを詠んだ歌がなく、「月

（天空）の語も歌中にあらわれないことから、従来、題詞と歌の内容との不一致に疑問がもたれてきたものである。今日では、月を望みえないまま歌が詠みつがれた状況を想定した解釈がなされている。

本稿では、この歌群をとりあげ、題詞のあり方や歌の表現を考察し、これら九首が月を見ながら詠まれたものとして解することが可能であり、題詞と歌の内容との間に、従来指摘されてきた不一致はないと判断されることを述べる。そして、これを遣新羅使人歌群全体が抱える諸問題を解くための端緒としたい。

二

問題の九首は次の通りである。

海辺に月を望みて作る歌九首

1 秋風は日に異に吹きぬ我妹子は何時とか我を齋ひ待つらむ (三六五)

大使の第二男

2 神さぶる荒津の崎に寄する波間なくや妹に恋ひ渡りなむ (三六六)

右の一首、土師稻足

3 風のむた寄せ来る波にいざりする海人娘子らが裳の裾濡れぬ 一に云ふ、「海人の娘子が裳の裾濡れぬ」 (三六七)

4 天の原振り放け見れば夜そ更けにけるよしゑやしひとり寝る夜は明けば明けぬとも (三六八)

右の一首、旋頭歌なり。

5 わたつみの沖つ繩のりくる時と妹が待つらむ月は経につつ (三六九)

6 志賀の浦にいざりする海人明け来れば浦廻漕ぐらし梶の音聞こゆ (三七〇)

7 妹を思ひ眠の寝らえぬに暁の朝霧隠り雁がねそ鳴く

(三七〇)

8 夕されば秋風寒し我妹子が解き洗ひ衣行きてはや着む (三七〇)

(三七〇)

9 我が旅は久しくあらしこの我が着る妹が衣の垢付く見れば (三七〇)

(三七〇)

ここで、題詞と歌の内容の関係にふれている主な注釈を挙げてみる。

代匠記―此九首ノ中ニ、月ヲ望メル意アル哥ナシ。若

日ヲ誤テ月ニ作ケル歟。然ラハ海邊ニ望ム日

ト讀ヘシ。

童蒙抄―此望の字不審也。經の字の誤歟。

井上新考―望月は望郷の誤か

全釈―以下の九首は、一も月を詠んだものはないが、

月前に宴でも催した時の作であろう。

総釈―前の「筑紫館に至り遥に本郷を望み云々」の中

にも殆ど直接望郷の歌がなかつたと同じ様に、

この一群の中にも月そのものを詠んだ歌は一首

もない。

窪田評釈―「月を望みて」とあるが、九首の中、月そ

のものを対象とした歌は一首もなく、月光

の下での感懐という範圍のものばかりである。宴を開いて、宴歌として詠んだものかと思われる。

全註釈―筑紫の館附近の海邊で、月を見て詠んだ歌。

但し月の歌はない。月下に諸人が集まつて詠んだのであらう。

集成本―「月を望みて」とあるが、月の歌はない。

全注―月を詠み入れた作も、特に月夜の作として見なければならぬ作もない。

釈注―題詞に「月を望みて」と明記するにもかかわらず、九首の中には「月」に関する歌が一首もない。

ここに挙げた注釈はいずれも題詞と歌の内容との不一致に疑問を抱いている。このうち、契沖『万葉代匠記』（精撰本）、荷田信名『万葉集董蒙抄』、井上通泰『万葉集新考』は、その解決策として誤字説をとなえているが、題詞「望月」にはどの写本にも本文の異同がみられないので従うことはできない。また、今井邦子『万葉集総釈』、集成本は、事実を指摘するだけで解釈にいたっていない。その中で、鴻巣盛広『万葉集全釈』は月前宴説、窪田空穂『万葉集評釈』は宴歌説、武田祐吉『万葉集全註釈』は月下説

を説き、月光下での感懐を詠んだものと解した。しかし、吉井巖『万葉集全注』、伊藤博『万葉集釈注』は、この説に否定的である。吉井氏は、題詞と歌の關係だけでなく、歌群全体の成立についても疑問を投げかけ、慎重な姿勢をとっている。一方、伊藤氏には、「釈注」でも紹介しているように、この歌群をとりあげた詳しい論があるので、それによって、以下伊藤説をみていく。氏は、まず次のように述べている。³⁾

「海辺にして月を望みて作る歌」と題しながら、月を見はるかす歌はおろか、月下の気配を感じさせる歌すら、一首とてない。第一、「月」（天体）という言葉さえ、どの歌にも一つとして現れない。奇妙というほかはない。

そして、この難問を解く鍵は4の旋頭歌が握っているとして、この問題に対して新たな試案を示している。氏は、第二句「振り放け見る」は本来予祝の表現であるとし、対象に関わる期待と願望の表現としての意義をもつと考える。さらに、その表現の下には作者にとつての肯定の世界が点出されることも指摘する。そして「振り放け見れば」を期待と願望の表現ととらえた上で、4の歌では、その期待、願望とまったく反対の「夜そ更けにける」という表現が出てくることに注意し、「振り放け見れば」の表現のあり方

からいって、この歌は唯一の例外であるとしている。このような表現となったことに対する解釈としては、次のように述べている。

答は、月を見つめようとして「天の原」を「振り放け見」たのであったが、月の冴えはそこにはなく、黒々と更けて行く夜のみが存在したということではかないであろう。(中略) 大使の第二男一行は、「海辺にして月を望む」という目的のもと、博多湾の岸辺に集まったのだが、時はあいにくの曇り空で、終始月を望みえないままに歌を詠み続けなければならなかった、というのがそれである。

また、4の歌において月が出ないと観念され、「よしゑやしひとり寝る夜は明けば明けぬとも」と投げ出されてしまえば、それより後の歌が月とはまったく無縁の方向に進むことは必定だとしている。さらに伊藤氏は、この存在意義のはなはだ重い4の歌が旋頭歌であることに注目し、巻十五における他の旋頭歌の用例を検討することによって、それらがあるべきところに位置して意味深い内容と存在を示していることを論じ、旋頭歌論からこの歌群に解釈を加えている。

この歌群については、川端善明氏にも論がある。⁵⁾氏は伊藤説をふまえつつ、4を実際に月はないがあるべき月の方

向をみて作られた歌と解釈する。題詞の月については、「ことごとくとしての月であった。ものとしての月ではなかった」と述べ、実際にあった宴の結果の歌稿に一つの統一として整理されたものとみなす。また、この歌群が虚構であった場合の解釈として、この九首は「題をめぐらす」歌群であり、「(4の歌で)月が出ないとよまれたそのとき、視覚になかった月をあらしめ、且つ、語において隠す」という発想によつて編まれたのだと考える。

両氏ともに、作歌の場に月はでていなかったとする立場をとる。

三

しかし、別の解釈も可能である。以下、先行研究の問題点を指摘しながら、それに考察を加え、私見を述べる。

まず、題詞の「望」に注目したい。「望」には大きく分けて、①遠くを眺める、②願う(求める)、③怨むの意がある。万葉集中、歌以外の部分では、題詞に十例(当該歌群含む)、左注に六例、書簡・序文に十例みえる。①の例がほとんどで、②の例は四例、③の例はわずか一例みえるのみである。ここでは、題詞の例を挙げる。

a 天皇登香具山望国之時御製歌

b 和銅三年庚戌春二月、從藤原宮遷于寧樂宮時、御輿停
長屋原、廻望古郷作歌 (一・七〇)

c 但馬皇女薨後、穗積皇子、冬日雪落、遙望御墓、悲傷
流涕御作歌一首 (三・三〇三)

d 山部宿祢赤人望不尽山歌一首 并短歌 (三・三七・三〇)

e 夏四月、大伴坂上郎女、奉拜賀茂神社之時、便超相坂
山、望見近江海、而晚頭還來作歌一首 (六・一〇七)

f 至筑紫館、遙望本郷、悽愴作歌四首 (五・三六三〜三六五)

g 海辺望月作歌九首 (十五・三六九〜三七七)

h 肥前国松浦郡狛嶋亭船泊之夜、遙望海浪、各働旅心作
歌七首 (十五・三六一〜三六七)

i 到对馬嶋浅茅浦船泊之時、不得順風、經停五箇日。於
是瞻望物華、各陳働心作歌三首 (十五・三六七〜三六九)

j 十二日、遊覽布勢水海、船泊於多祇灣、望見藤花、各
述懷作歌四首 (十九・四一九〜四三三)

右のように、特に題詞で「望」といった場合には、例外なく①の「遠くを眺める」意で解釈できるから、当該歌群の題詞「望」もこの意でとるべきである。⁽⁶⁾
では、題詞と歌の内容はどのような関係にあるのか。題詞に「―を望みて作る」とある歌の中に、その対象があらわれるものなのか否かをまとめたものが表1である。

表1 「―を望みて作る歌(望―)」

題詞	歌中に対象無し
a	二
b	七八
c	二〇三
d	三一七・三一八
e	一〇一七
f	三六五二〜三六五五
g	三六五九〜三六六七
h	三六八一〜三六八四・三六八六・三六八七
i	三六九七〜三六九九
j	四一九九〜四二〇二

これを見ると、題詞に「―を望みて作る」とある場合、必ずしもその対象が歌中にあらわれるわけではないことがわかる。

ここでは、もう少し詳しくみるために、題詞に「月を見て作る」とある歌(表2)と「月を詠む」とある歌(表3)とをくらべてみる。ふつう「月を詠む」といった場合は、実際に月を見ていなくても詠むことができる。ただし、表3の結果のように、月は必ず詠まれる対象として歌中にあらわれる。一方、表2のように「月を見て作る」といっ

た場合、歌の内容は月を見て作られたものになり、「見る」という動作に重点がおかれる。この場合、月は詠まれる対象としてあるだけでなく、それを見ておこる感慨を詠むきつかけとしてあるのである。「月を詠む」といった場合とは違つて、歌の詠まれた状況を説明する働きが強い。このように「―を見て作る」といった例に、対象そのものを詠む歌ばかりでなく、対象を見ることによつておこつた感慨を詠む歌があるのは、「―を詠む」といった例との違いを考えれば、不自然なことではない。

表2 月を見て作る歌（見観月）「望月」

題詞	歌中に「月」有り	歌中に「月」無し
従長門浦船出之夜、仰観月光作歌三首	三六八二 三六二三	三六二四
海辺望月作歌九首		三六五九 三六六七
到筑前国志麻郡之韓亭、舶泊經三日。於時夜月之光、皎皎流照。奄对此華、旅情悽噫。各陳心緒、聊以裁歌六首	三六七一 三六七二	三六六八 三六七〇 三六七三
従珠洲郡莞船、還大沼郡之時、泊長浜灣、仰見月光作歌一首	四〇二九	
還時、浜上仰見月光歌一首	四二〇六	

表3 月を詠む歌（詠月）「寄月」「月歌」

題詞	歌中に「月」有り	歌中に「月」無し
間人宿祢大浦初月歌二首	二八九・二九〇	
滿誓沙弥月歌一首	三九三	
安倍朝臣虫麻呂月歌一首	九八〇	
大伴坂上郎女月歌三首	九八一〜九八三	
豊前国娘子月歌一首	九八四	
湯原王月歌二首	九八五・九八六	
藤原八束朝臣月歌一首	九八七	
同坂上郎女初月歌一首	九九三	
大伴宿祢家持初月歌一首	九九四	
詠月	一〇六九〜一〇八六 一八七四〜一八七六 二二二三〜二二二九 二二三三	
寄月	一三七二〜一三七四 二二九八〜三三〇〇	一三七五?
登筑波山詠月一首	一七二二	
宴席詠雪月梅花歌一首	四一三四	

しかし、なぜ当該歌群では月が一首も詠まれていないのか、という疑問は残る。その点については、題詞の「望」と「見」の違いから推測できる。「望」は十例、「見」は表2の例をあわせて三十七例ある。全体の傾向としては、「望」は、その対象が「国」「墓」「故郷」「富士山」「海」などとあつて「見」にくらべて距離的に遠く、対象の全体をあわせみるような場合につかわれる。一方、

「見」の対象は、「屍」「結松」「漁父灯火」「濱貝」「砌上瞿麦」「潜鶉人」「翻翔鳴」「巖上樹」「攀折柳条」などとあり、対象との距離が「望」にくらべて近いだけに、具体的である。表2の月を対象とした例をみても、「望」の場合は、「月を望む」とあり、「見(観)」の場合は、いずれも「月光を見る」とある点が注意される。

つまり、「見」は、その対象が具体的であることからわかるように、英語の「look」にあたり、意識的であり対象に対する注目度が高いと考えられる。それにくらべて、「望」は「look」にあたり、対象に対する注目度が低く、だからこそ、「月光を見る」とはいい得ても、「月光を望む」とはいい得なかったのではないか。「望月」という題詞は、「月を漠然と見やりながら」、もつといえは「月の出ている夜に」という状況説明としてあるのだと思われる。そしてこの違いに相応した結果として、題詞に「見(観)月光」

とある歌群には、月が詠みこまれた歌が必ず含まれるが、題詞に「望月」とある当該歌群の場合、そこに月は一首も詠まれなかったのだと考えることができよう。このように考えると、当該歌群に月が一首も詠まれていないことの説明がつく。題詞のあり方からすれば、月が一首も詠まれていないからといって、月が出ていなかったわけではないことがわかる。

四

次に、この歌群の題詞「望月」がどのように歌の内容と関わっているのかみていく。まず4の歌に注目してみる。先述の伊藤氏の論では、「夜そ更けにける」を「月が出ていない状態」ととらえるが、この表現に対しては別の見方も可能である。なぜなら、万葉集中には、次の10、11、14のように出ている月が傾くことで夜が更けたことを認識する歌や、12、13のように夜が更けて月が出てくることを詠んだ歌が存在するからだ。

10 さ夜中と夜は更けぬらし雁が音の間こゆる空を月渡る
見ゆ (九・一七〇)

11 この夜らはさ夜更けぬらし雁が音の間こゆる空ゆ月立ち渡る
(十・三三四)

12 さ夜更けば出で来む月を高山の峰の白雲隠してむかも

(十・三三三)

13 かくだにも妹を待ちなむさ夜更けて出で来し月の傾く
までに (十一・二八二〇)

14 ぬばたまの夜は更けぬらし玉櫛笥二上山に月傾きぬ
(十七・三九五五)

また、「夜が更ける」という表現のあり方からも同じこと
といえる。このような表現は万葉集中に五十五首五十七
例あるが、大きく三つのパターンに分けられる。

I くしていると（しているうちに）夜が更ける

妹がりと我が行く道の川しあればつくめ結ぶと夜そ更け
にける (八・一五五六)

天の川去年の渡りでうつろへば川瀬を踏むに夜そ更けに
ける (十・三〇二〇)

II 夜が更けるとくする

ぬばたまの夜のふけゆけば久木生ふる清き川原に千鳥し
ば鳴く (六・九三三)

天の川霧立ち渡り彦星の梶の音聞こゆ夜の更け行けば
(十・三〇二四)

III くによって夜が更けたことを知る

先掲の用例 10、11、14

このうち、タイプIの「く」にあたる動作は、例に挙げ
たものの他、「待つ」「恋ふ」「行く」などのように時間的
に幅をもつものであることが注意される。「夜が更ける」
という表現は、時間の経過を表すもので、それゆえに単独
で用いられることが少ない。夜が更けるまでの行為、夜が
更けてからの行為、あるいは、夜更けを認識するきっかけ
となる現象とともに詠まれるのである。次の15は、第三句
以下の表現が4の歌に類似していることから、多くの注釈
が引き合いに出す歌である。

15 我が背子は 待てど来まさず 天の原 振り放け見れ
ば ぬばたまの 夜も更けにけり… (十三・三三六〇)

この歌の場合、「夜が更ける」という表現の通例に従え
ば、一見「天の原振り放け見る」という行為が、タイプI
の「く」にあてはまるかのようにみえるが、「振り放け見
る」という行為に時間的幅はほとんどない。ただし、次の
或本歌に、

我が背子は 待てど来まさず 雁が音も とよみて寒
し ぬばたまの 夜も更けにけり… (十三・三三六〇)

とあり、この歌では「雁が音」を聞くことよって夜が更
けたことを認識しているとも考えられる。この「雁が音」
が夜更けを告げる素材であることは、先に挙げた用例10、
11などの歌からも確認できる。つまり、「夜が更ける」と

いう表現の通例に従えば、4の歌の背景にも、夜が更けたことを知るきっかけとなった現象があつたと考えられるのである。

さらに、4の歌と、それに類似した15の歌の両者にみられる「天の原振り放け見れば」という表現をみでみる。この表現を用いた歌は他に五例ある。

天の原振り放け見れば大君の御寿は長く天足らしたり

(三・四七)

天の原振り放け見れば白真弓張りてかけたり夜道は良
けむ

(三・六六)

駿河なる富士の高嶺を天の原振り放け見れば
渡る日の影も隠らひ照る月の光も見えず白雲
もい行きはばかり時しくそ雪は降りける…

(三・三七)

天の原振り放け見れば天の川霧立ち渡る君は来ぬらし

(十・三〇六)

…天の原振り放け見れば照る月も満ち欠けしけ
り…

(十九・四二六)

これらを見ると、「天の原振り放け見れば」の「見る」対象は、当然「天の原」という天空なのだが、そこには波線部のように具体的な対象が存在していることがわかる。ただ漠然と「天の原」をみているのではなく、そこにある

月や雪、霧といったものを「見る」の対象としてとらえており、4の歌の「見る」も、ある具体的な対象をとらえていたと考えられる。

以上の点をふまえ、題詞の「月を望みて」という作歌事情を考え合わせると、たとえ「月」の語が実際に用いられていなくても、作者が「夜が更けた」と判断したのは、そこに西の空に傾いていく月をみたからであるという可能性も考えられる。当該歌群が、七夕に詠まれたとされる歌群の後に位置しており、ここに七日以降十五日頃の月を想定すれば、その頃の月は夜が更けてから西に沈むことから、この推定の妥当性は裏づけられる。歌中に「月」の語が詠まれていなくても月を見て詠まれた可能性は十分考えられるのである。

五

さて、これら九首が月を見ながら詠んだ歌であるならば、月と歌の内容との間に密接な関係があるはずである。ここでは、この歌群の考察をすすめる前に、万葉集において月がどのようにとらえられていたのか簡単にみてみたい。まず、歌中に表現されているもののみを対象とすると、月を詠んだ歌は一九六例ある。巻別にみると「詠月」の題で収載している巻七や巻十、及び寄物陳思歌を収めている巻十

一に集中していることがわかる。特に巻十一では、全二十四例のうち十八例が寄物陳思歌であり、月が想いを寄せられる対象であったことがうかがえる。このうち複合語「日月」(「月日」一例含む)八例、および枕詞の二例を除いた一八六例をその内容別に分類すると主に次のようになる。抜粋した用例とともに挙げてみる。

A月の出を待つもの・月の入りを惜しむもの

熱田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな (二・八)

天の原雲なき夕にぬばたまの夜渡る月の入らまく惜しむ (九・一七三)

照る月を雲な隠しそ島陰に我が船泊てむ泊まり知らずも (九・一七二)

倉椅の山を高みか夜隠りに出で来る月の片待ち難き (九・一七三)

B月を見て恋人を想うもの

春日山おして照らせるこの月は妹が庭にもさやけかけり (七・一〇四)

遠き妹が振り放け見つつ偲ふらむこの月の面に雲なたなびき (十一・三四〇)

ひさかたの天照る月の隠りなば何になぞへて妹を偲は

む (十一・二四六)

我が背子が振り放け見つつ嘆くらむ清き月夜に雲なたなびき (十一・二六九)

16 ひさかたの天照る月は見つれども我が思ふ妹に逢はぬころかも (十五・三六五)

C月夜の逢会を詠むもの

17 春日山霞たなびき心ぐく照れる月夜にひとりかも寝む (四・七三)

18 月夜には門に出で立ち夕占問ひ足占をせし行かまくを欲り (四・七三)

一重山隔れるものを月夜良み門に出で立ち妹か待つらむ (四・七三)

19 闇ならばうべも来まさじ梅の花咲ける月夜に出でまじとや (八・一四五)

月夜良み妹に逢はむと直道から我は来つれど夜そ更けにける (十一・三二八)

月夜良み門に出で立ち足占して行く時さへや妹に逢はざらむ (十二・三〇〇)

D月を恋人にたとえるもの

：照る月の雲隠ること 沖つ藻の なびきし妹はもみち葉の 過ぎて去にきと： (三・三〇七)

秋の夜の月かも君は雲隠りしましく見ねばここだ恋し

き (十・三九七)

E 月を恋人と逢うまでの時の経過として詠むもの

20 この月のここに来れば今とかも妹が出で立ち待ちつつ
あるらむ (七・一〇七)

秋風に今か今かと紐解きてうら待ち居るに月傾きぬ

(三・四三二)

F 月の出と恋人の訪れを重ねるもの

妹が目の見まく欲しけく夕闇の木の葉隠れる月待つごとし
(十一・二六六)

21 あしひきの山より出づる月待つと人には言ひて妹待つ

我を (十二・三〇二)

あしひきの山を木高み夕月をいつかと君を待つが苦し
き (十二・三〇〇)

G その他

22 ぬばたまの夜渡る月にあらませば家なる妹に逢ひて来
ましを (十五・三六七)

このうち、Aの「月の出を待つ・月の入りを惜しむもの」をみると、当時、夜の航海や陸上での旅において月は不可欠な光源であり、夜の生活に切実に月を求めていたことが理解される。しかし、Aの全体的傾向からいえば、航海や旅のために月を待つというばかりではなく、単に月を

待つという歌が大半を占めている。その中には、天空の現象や自然を畏敬しつつも、そこに親しみを感じ、美を見出す対象として月をとらえている例もあり、ここに、月に對する深い憧憬を認めることができる。

ところで、一八六例全体を通して最も多いのは、BCD EFのように月を見て恋人を想起する歌である。これを見ると、月は遠く隔たった恋人たちの「頼みの綱」であり、橋渡しのな働きをもっていたことがわかる。このことは、「自分が夜空を渡る月であったなら妻に逢いにゆけるのに」と歌う22などにも反映されている。

このように月と恋人が結びつけられる背景には、主に、月も恋人も現れることが待望されるという共通性や、月の見える時間帯と恋人に逢える時間帯の重複が影響していると考えられる。男女の逢会の時間は一般的に、夕から朝にかけてであったとされる。

23 朝戸出の君が姿をよく見ずて長き春日を恋ひや暮らさむ
(十・二九五)

朝去にて夕は来ます君故にゆゆしくも我は嘆きつるかも
(十二・二九三)

24 夕さらば君に逢はむと思へこそ日の暮るらくも嬉しかりけれ
(十二・二九三)

25 朝鳥早くな鳴きそ我が背子が朝明の姿見れば悲しも

逢会の夜が終わり、朝になって男が出ていくことを、23にあるように「朝戸出」という。また、24では、夜になると恋人に逢うことができる喜びを詠み、25では、朝、恋人と別れなければならない辛さを詠んでいる。

さらに、Cの「月夜の逢会を詠むもの」をみてみると、月夜に男女が逢会することが一般的な行為であったことが推測される。先掲の17と18は大伴坂上大嬢と家持の贈答歌である。17では、月の照る夜なのにひとり寝しなければならぬことを嘆き、それを受けて、18では月の照る夜だからこそあなたに逢いに行こうとして、夕占をしたり足占をしたりしたのだと答えている。また、16や19では、月が出ているのに恋人と会えないことを嘆いている。特に19の歌では、闇夜なら訪れて来ないことも納得できるが、なぜ月夜なのに訪れて来ないのかと相手を非難している。さらに、20や21では、月の位置から恋人の訪れを予測したり、恋人を待つことと月の出を待つことを重ねて詠んだりしている。

以上のように、万葉集では、月は単なる光源として人々から待望されるだけではなく、特に、恋する人と逢えないという状況下で切実に詠まれるものであり、現実には逢うことの困難な恋人への想いを寄せるよすがであったと考えられる。このような発想が当該歌群の歌の背景として少な

からずあったことを、ここでは確認しておきたい。¹⁰⁾

六

さて、ここで、当該歌群の月を見て詠まれた可能性を再度確認するために、4の歌にもどり、第四句以下の「よしゑやしひとり寝る夜は明けば明けぬとも」という表現に注目してみる。伊藤氏は、この歌を次のように解釈している。¹¹⁾

「こんな月も出ぬ、家郷の妻と離れて独りわびしく寝なければならぬような夜なんか、明けるなら明けてしまっても一向にかまわぬ」の意になることが明らかであろう。

氏は、この一首を月が出ないことを観念した歌としてとらえている。しかし、この解釈では、月が出ないことを観念した上三句と、それを受けての第四句「ひとり寝る夜」とのつながりがみえてこない。この歌では「ひとり寝る夜」という表現に、歌の主意が隠されていると思われる。

万葉集では、「ひとり寝る」という表現は、多く共寝に相對して使われる。この歌は「海辺にして月を望む」という状況のもと、大使の第二男一行が集まって詠んだ歌群中の一首であり、現実には、夜が明ける際に作者は他の人とともにいる。にもかかわらず、「ひとり寝る夜」と表現するのは、当然一緒に寝たい恋人と寝ることができないから

である。つまり、この表現は、恋人と逢うことができずに夜を過ぎかねばならぬ嘆きの表現だといえる。この4の第四句以下とまったく同じ表現を用いた次の歌においてもそれは同様である。

暁と鶏は鳴くなりよしゑやしひとり寝る夜は明けば明
けぬとも (十一・二〇〇)

この歌は待つていた恋人に逢えなかつた嘆きを詠んでおり、「よしゑやし」以下が、恋の嘆きの表現になっている。4では、この嘆きが「天の原振り放け見れば夜そ更けにける」という句を受けて表現されていることを考えると、この上三句に「ひとり寝る夜」を意識させる状況が詠まれていると推測される。すると、第四句以下の表現の中に作者のある感情をとらえることができる。この歌において「よしゑやし」という放任の意を示す語を用いてまでも「ひとり寝る夜」に対する恨みを詠んでいるのは、そこにひとりではなく、逆に恋人との共寝を可能にさせる条件があつたからだとも考えられる。しかし、実際には旅の途中という状況によつて、それがかなえられない、だからこそ「ひとり寝る夜」に対して一層捨鉢な気持ちを抱くのではないだろうか。そして、ここにいる共寝を可能にさせる条件が、月が出てゐることだということは、題詞にある作歌事情からも容易に理解される。

つまり、4の歌は、「月が出てゐるので旅の途中でなければ、恋人と逢うことができるのに、それがかなえられない夜なんて、明けるなら明けてしまつてもかまわない」という作者の心情を詠んだ歌としても解釈できるのである。

七

最後に残りの歌についてもふれておく。まず、1、8の歌には「秋風」が詠まれているが、この「秋風」を詠んだ代表的なものに次の歌があり、1、8の歌も月下に詠まれた歌として解釈することができる。

君に恋ひしなえうらぶれ我が居れば秋風吹きて月傾き
ぬ (十・三三六)

7にみえる「雁が音」も、次に挙げる例のように、万葉集では、月とともに詠まれることの多い景物である。

さ夜中と夜は更けぬらし雁が音の聞こゆる空を月渡る
見ゆ (九・二七二)

この夜らはさ夜更けぬらし雁が音の聞こゆる空ゆ月立
ち渡る (十・三三四)

さ雄鹿の妻問ふ時に月を良み雁が音聞こゆ今し来らし
も (十・三三三)

また、3では、寄せる波にいざりする海人娘子らの裳の裾が濡れている景を詠んでいるが、濡れた裳の裾が目を引き

いたのは、それが月光に照らされていたためと考えられる。6は、「梶の音聞こゆ」とあるように、志賀島の海人たちが漁をしているのは筑紫館近くの海辺からは見えないであろうが、その海人たちは、月明かりによって漁をしているとみることもできる。月夜の船出や月下のいざりを詠んだ次のような例もある。

熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな (二・〇)

山の端に月傾けばいざりする海人の灯火沖になづさふ

(十五・三六三)

ひさかたの月は照りたり暇なく海人のいざりは灯し合へり見ゆ (十五・三六七)

さらに、1、2、4、5、7、8、9は、それぞれ、「妹はいつ帰ると思つて私を待っているだろうか」、「波のように絶え間なく妹を思い続けていくのだろうか」、「妹に逢えない一人寝の夜なんて明けてしまってもかまわない」、「妹が待っている月はどんどん過ぎてゆく」、「妹を慕つて寝ることもできない」、「妹が解き洗いをする、あの日頃の衣を、家に帰って早く着たい」、「形見として着ている妹の下着が垢づいたのをみると旅も長くなったと感じる」とあり、妹を恋慕い、妹の様子を思いやる内容である。これは、海辺で眺めた月が恋人を想うよすがとなったからであり、

歌の詠まれる場に月が共通の対象としてあつたのだと考えられる。これと同じことが、当該歌群の次に位置する歌群にもいえる。

筑前国志麻郡の韓亭に至り、船舶まりして三日を
経ぬ。ここに夜月の光、皎皎に流照す。奄ちにこ
の華に對し、旅情悽愴す。各心緒を陳べ、聊かに
裁る歌六首

大君の遠の朝廷と思へれど日長くしあれば恋ひにける
かも (三六六)

右の一首、大使

旅にあれど夜は火燈し居る我を闇にや妹が恋ひつつあ
るらむ (三六六)

右の一首、判官

韓亭能許の浦波立たぬ日はあれども家に恋ひぬ日はな
し (三六七)

*ぬばたまの夜渡る月にあらませば家なる妹に逢ひて来
ましを (三六七)

*ひさかたの月は照りたり暇なく海人のいざりは灯し合
へり見ゆ (三六七)

風吹けば沖つ白波恐みと能許の泊まりにあまた夜を寝
る (三六七)

この歌群では、題詞の傍線部にある通り、歌を詠むきつ

かけとなったのは「この華」である。この「華」とは、月華、すなわち月の光のことであり、この六首は月の光を見ながら詠んだ歌である。しかし、このうち歌中に月を詠み込んだものは*印を付した二首のみで、残り四首に「月」はでてこない。ただし、その四首のうち三首の内容が、妹あるいは妹のいる家や都を恋慕うという内容になっており、当該歌群と性格を同じくする。旅という状況がそのよ
うな感情をもたらしたことは当然であるが、題詞にもある通り、単なる旅情ではなく「月に促された」旅情なのである。

以上、この歌群の題詞に「月を望む」とあることは、題詞のあり方、歌の表現、歌の内容からみて不自然ではないと考える。「海辺に月を望みて作る歌」という題詞は「海辺で月を眺めるうちに、旅情がわきおこって作る歌」とい
いかえることもできるから、題詞と歌の内容との間に従来指摘されてきた不一致はないと考える。

注

(1) 主に以下の論文でとりあげられている。

服部喜美子氏「遣新羅使人たち」(『萬葉集講座』第六卷
有精堂 昭和47年)、伊藤博氏「萬葉集の構造と成立下
古代和歌史研究2」(『塙書房 昭和49年)、後藤利雄氏

「遣新羅使歌群の構成」(『万葉集を学ぶ』第七集 有斐閣 昭和53年)、原田貞義氏「遣新羅使人歌抄」(『万葉集を学ぶ』第七集 有斐閣 昭和53年)、阪下圭八氏「遣新羅使人と古歌」(『万葉集を学ぶ』第七集 有斐閣 昭和53年)、近藤健史氏「遣新羅使人歌とその場―長門の浦船出歌群の場合―」(『上代文学』四三三号 昭和54年11月)、吉井巖氏「遣新羅使歌群―その成立の過程―」(『日本古代論集』笠間叢書144 昭和55年)、壬生幸子氏「遣新羅使歌群の長歌―配置と機能―」(『美夫君志』二七号 昭和58年8月)、高橋庄次氏「万葉集卷十五の研究 連作歌巻論」(桜楓社 昭和63年)

(2) 以下、万葉集の引用は、『新編日本古典文学全集 万葉集』に拠る。

(3) 「海辺にして月を望む歌―万葉集卷十五旋頭歌の論」(『国語と国文学』六五卷一二号 昭和63年12月) 初出、
『萬葉集の歌群と配列下 古代和歌史研究8』(塙書房 平成2年) 所収―二二二頁

(4) 注(3) 前掲書―二三五頁

(5) 川端善明氏「海辺の感情」(『伊藤博博士古稀記念論文 集 萬葉學藻』塙書房 平成8年)

(6) 実際に対象がみえるかどうかはわからないfhについては「遥望」となっていることからわかるように、逆に「望」といった場合には、対象を実際にみていると解釈できる。

(7) 二八九番歌と九八三番歌はそれぞれ「しらまゆみ」

「さらえをとこ」という語で、月を比喩的に詠んでいるが、一三七五番歌には比喩的に詠まれた月もでてこない。しかし、その点の不自然さについては、左注に、「闇の夜の作者」（一三七四番歌の作者）が思うところに従って、続けてこの歌も作ったので、ここに載せた」とあるので、この歌は例外と考える。

(8) 題詞「望」「見（観）」の両者に共通してみられる対象は、月のみ。

(9) 用例の収集、枕詞の認定などはすべて『新編日本古典文学全集 萬葉集』に拠る。

(10) この月夜と男女の逢会の関係については、古橋信孝氏が著書『古代の恋愛生活―万葉集の恋歌を読む』（日本放送出版協会 昭和63年）において詳しく述べている。ただし、古橋氏のこの説を批判するものに、工藤力男氏の論文「八月夜の逢会・雨夜の禁忌考」（『国語国文』六六号、平成9年4月）がある。氏は、古橋氏の挙げている用例を再検討し、特に、古橋説の「男女の逢引きは月夜に限られていた」という部分を強く批判している。確かに、この断定にはいささかの不安もあり、用例から月夜の逢い引きを想定するのではなく、月夜の逢い引きを前提として個々の歌を解釈し、やや曲解しているものがあることは、古橋説をそのまま信頼できない点でもある。しかし、古橋説が成り立つか否かは別として、月が恋人を想起するものとしてあったことは、先にふれた用例からみても否定できず、当該歌群のように題詞に「月

を望みて」とある場合、その傾向はおさえておかねばならないと考える。

(11) 注(3) 前掲書一三三六頁

〔付記〕本稿は、平成十一年一月九日の上代文学会例会における口頭発表を基にしたものであり、席上、ご教示いただいた諸先生方に厚く御礼申し上げます。また、稿を成すにあたり、編集委員の先生方から貴重なご意見、ご教示を賜りました。重ねて厚く御礼申し上げます。